

人間科学部 松永ゼミナール（認知心理学）活動報告

人間科学部 人間科学科 4年 村山貴実、岡田桜太郎

3年 梁葉飛、田中詩乃

松永研究室は、人間の基本的な心の仕組みを実験によって調べる心理学研究室です。

2年生が受講する専門ゼミ1と3年生が受講する専門ゼミ2では、専門書や学術論文を読み込み、心理学の知識と技術の習得を目指します。そして、4年生が受講する卒業研究では、自分の研究課題に取り組みます。また、本研究室で扱う研究テーマは、音楽を中心的なキーワードとしながら、知覚、記憶、言語、メタ認知、感情、クロスモーダルなど多岐に渡ります。このような幅広い領域の知識をゼミ発表という形を通して相手と共有し、理解を深めていきます。

松永研究室では、自分の取り組む卒業研究の課題を3年生の時に決めます。具体的に言いますと、3年生の前期に、ゼミの中での討論を繰り返して実験計画を練り、3〜4ヶ月かけて実験の準備を行います。3年生の終わり頃から4年生の夏休み頃まで実験を行い、その後は実験の結果を基に卒業論文を執筆します。実験の計画から実施、データ分析、執筆まで、すべて自身で考えて行うため、主体的かつ計画的に動くことが求められます。

どの学年もゼミ発表が主体であり、聞き手の立場も話し手の立場も経験します。発表時には聞き

手の立場にたった説明が求められ、不明瞭な点については他のゼミ生や松永先生に質問されます。この質疑応答を通して、自分では理解したと思っていたことも、きちんと理解できていないことがあることに気づかされます。同時に、正しく理解することの難しさを知ります。全体的に他の研究室と比べて厳しいですが、達成感を得られる研究室だと思います。

以下では、本研究室に属する3年生の梁葉飛と田中詩乃、4年生の岡田桜太郎と村山貴実の計4名が、研究室のゼミ活動、卒業研究を通して感じたことを具体的に紹介します。

自分の主張を正確に、自由に述べられる場

留学生として神奈川大学を受験した当初、社会コースを志望していました。入学後、講義を通して松永先生と出会い、認知心理学を学びたいと思い、松永研究室と心理コースに入りました。専門ゼミを選ぶとき、私はとても迷いました。ゼミはこれからの大学生活の中で最も重要な軸となるため、慎重に選ぶ必要があります。私が心理学を学びたいと決めたのは松永先生のおかげであり、松永研究室にこそやりたい研究がある、という自身

の思い、さらに、ゼミに関する松永先生の丁寧なご説明を聞いて、専門文献の読解を通して知識を習得し、科学データを読み解く論理的思考力を身につけて、自分の理解したことを相手に説明できるようになることがゼミの最初の達成目標とわかり、迷わずに松永研究室を志望しました。

松永研究室は専門性を重視していて、課題に真剣に取り組み姿勢が必要とされます。左の写真は、私達がまだ2年生のとき「音楽に関連する質問のまとめ」について議論した場面です。各々が音楽について抱く質問を書きだし、各質問の間にどのような関連があるのかを大きな紙に展開しまとめた後、関連性を明らかにし、取り組む研究の基本的なアイデアとしました。

2年生から論文を読み、論文やデータを基にして自分の主張を適切かつ論理的に表現することを学びます。松永研究室は、研究が好きな人の集まりとも言えま



ゼミ生同士の議論の様子

す。ここは、自分が疑問に思ったこと、今ある研究結果から考えたことを積極的かつ自由に述べる事ができる場です。
(3年 梁葉飛)

3年生から取り組む卒業研究

3年生は卒業研究に向けて準備を進めています。私たちは、2年生で学んだ音楽を認知する心についての基礎的な部分を活かし、大きなテーマを2つ(声という音色の記憶、音楽の知識の学習)設けました。その中でさらに研究内容を2つに分け、各3人程度のチームで研究に取り組んでいます。前期ではそのテーマや研究内容に関する複数の先行研究を読み知識や理解を深め、実際に自分たちが行う大まかな実験計画を立てる、という作業を行いました。そして後期では実験計画の詳細な部分を考え、実際に実験をするための準備を行っています。具体的な作業としては、パソコン上のソフトウェアを使った刺激、刺激を提示するプログラム、それらに伴う楽譜や質問紙などの作成です(上の写真)。中には大学のパソコンにも数台しか入っていないソフトウェアを使つて、より専門的な作業を行うこともあります。現在は班ごと



研究室での刺激作成の様子

に作業を進めていて、学年全体としては2週間に一度進捗報告会という形で集まっています。班での活動が主ではありますが、同じテーマの班とは密接に情報を共有しあったり、テーマが違う班同士でも共通する部分は教えてもらったりして、学年全体で音楽認知の研究に取り組んでいます。
(3年 田中詩乃)

卒業研究という集大成
松永研究室では3年生から卒業研究に取り組めます。私は、音声を扱った心理学実験を卒業研究のテーマとし、3年生で実施した予備実験の結果を踏まえて、4年生では本実験に臨みました(左の写真)。今年はコロナの関係もあり実験室に入る時間と日数に限りがあったため、3年生の時とは違う焦りがありました。3年生の時、私の予備実験に参加してくれた先輩方が、口々に「卒業研究は大変だよ」、「辛いよ」というのですが、いざ本実験と卒業論文の執筆をするまで何が辛いかわかっていませんでした。実際に本実験を行い、松永先生とのやりとりをしている中で、先輩方が卒業研究の何を大変だと言っていたかを理解することができました。心理



心理学実験の様子

コース・2年生の必修科目である心理学基礎実験実習でも実験を行います。実験内容や分析方法は既に決まったものでした。それとは違い、卒業研究は自分で実験内容や分析方法を考えて取り組みます。そのため、卒業研究に対する不安はいっぱいで、自信はありませんでした。ただ「絶対に終わらせてやる」という気持ちがあったため、着実に実験を進め、何とか12月の頭に基本枠を終わらせることができました。
(4年 岡田桜太郎)

汎用性が高い能力を身につける

松永研究室の活動を通して身についたと感じるのは「伝える力」と「論理的思考」です。度々行う発表では、情報を伝えることの難しさを痛感しました。相手に伝えるには簡単な言葉で簡潔に、順序だてて話す必要があると学びました。そしてその中で身についたのが論理的思考です。何かを理解するときにはもちろん、順序だてるとき、知りたいことへのアプローチ方法を考えるときなど、多くの場面で役立ちます。

研究活動を通して得た知識、視点は、普段の生活から勉強、仕事までも幅広い場面で役立つものです。成長ができるだけでなく、それに伴う自信も得られるゼミであると感じます。
(4年 村山貴実)